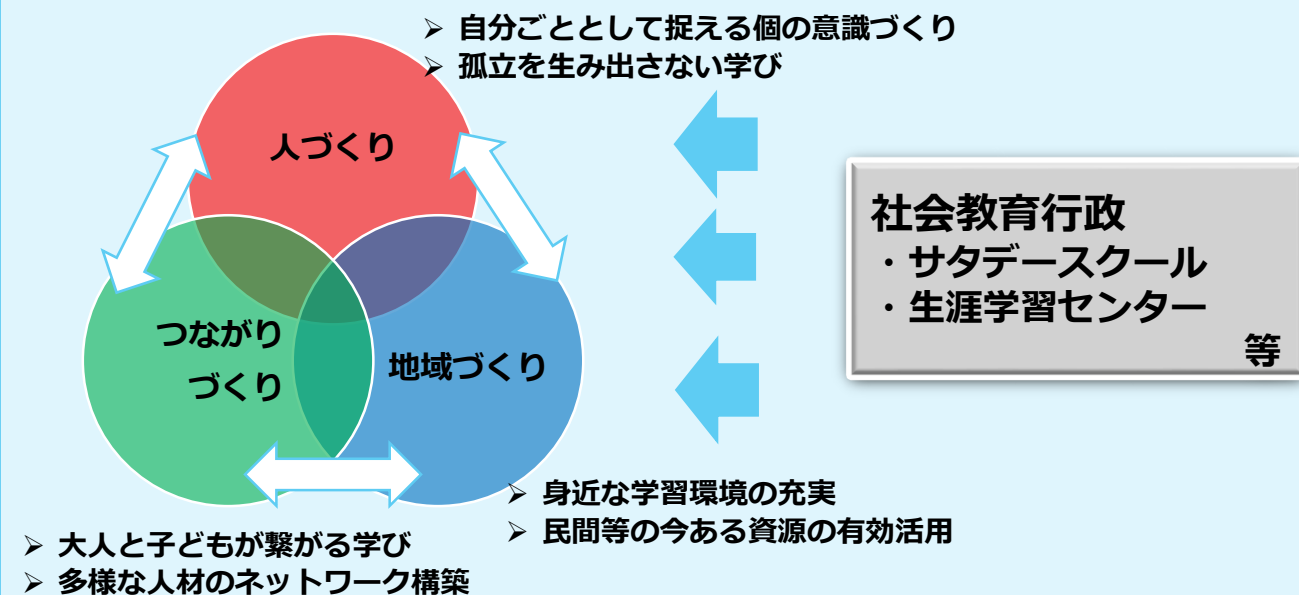


1. 前回会議までの協議内容の整理

■ 災害を例にした6つの項目から見た主な課題（一部抜粋）

学 習 ・ 教 育	子どもの学びが、家庭や大人に浸透するような、 <u>機会の創出</u>
情報リテラシー	情報弱者への配慮や情報モラルの教育
地 域 コ ミ ュ ニ テ ィ	行政や町内会だけでなく、民間や学校、NPO法人等と連携した学習環境の充実
リ ー ダ ー	リーダーを新たに育てるのみではなく、既に地域で活動しており地域を知っているリーダーの活用
防 災 活 動	学びの意識を他人ごとではなく、 <u>自分ごととして捉える</u>
多 様 性	年代や考え方、思想等、違う側面を持つ人材が、 <u>お互いの立場を理解し合い、共有できるきっかけづくり</u>

■ 社会教育における3つの視点（柱）と6つの取組の方向（キーワード）



【第7回会議での今後の協議の方向性に対する主な意見】

○3つの視点でまとめることは非常に素晴らしい。災害の視点からも良い。
 ○取組の方向は良いが3つの視点で明確に分類できるものではない。3つの視点が重なるイメージ。
 ○視点、取組の方向は段階でもなく、区分できるものでもない。それぞれが繋がりがあって、広がっていくようなもの。そのために、社会教育行政が「きっかけ」を作っておくことが重要。
 ○つながりの形を考えると、札幌市の社会教育行政の何を活用できるのか整理が必要。
 サタデースクールがプラットフォームになるのではないかと。コロナ禍においてはICT環境の整備が必要で、生涯学習センターが核となる。

2. 提言の作成に向けて

【第7回会議での提言作成に向けた主な意見】

- 札幌市の独自性が見える内容にしたい。
- 社会教育士のように、人づくりには専門性のある人材が必要だと感じた。
- 「レンタルなんもしない人」のように誰かが明確な役割を持つのではなく、そこに居るだけで人が救われる。そういったつながりが、札幌のように大きな都市のなかでは必要ではないか。
- 責任を負わなくてもいい。そういったフラットな感覚で参加できる地域や環境づくりが大切ではないか。
- ボランティアのマッチングアプリのような、もっと気軽につながり合える仕組みづくりが欲しい。
- ボランティアは単なる募集ではなかなか集まりにくい、直接依頼されたら行く人は多いのではないかと。そういった呼びかけが実現できるシステムづくり。
- 助けを必要とする人が、助けを求めるスキルも重要ではないか。
- ボランティアを推進するのであれば、ボランティア教育も大切。
- 自分が地域の一員と自覚できるように、地域のなかで自分は役に立っているという感覚を育む学習機会の提供。
- 避難所を学習拠点として位置づける。そのためには防犯上の課題も。
- 子どもを先生にして大人が学ぶ新しいスタイルの試み。SNSやICTは子どもの方が精通していることが多い。子どもの意欲を高めることにもつながる。

第8回社会教育委員会議

3つの視点や6つの取組の方向、これまでの協議内容をもとに、提言の具体的な内容について協議する

参考：コロナ禍における社会教育行政の事業の実施状況

■ サッポロサタデースクール

昨年度は47校で実施。今年度はコロナ禍で学校の臨時休校があり、再開後も入校制限等の影響を受け、実施校が減少。現在も活動の延期や中止が相次いでいる。

子どもの「学び」と「体験」を充実させるために、地域人材等による対面を主とした活動が行われているが、コロナ禍においては活動の在り方が問われている。また、学校を活動の拠点としているため、適切な感染症対策を講じる必要がある。



令和元年度開催の事業の様子（コロナ以前）



令和2年度開催の事業の様子

■ 札幌市生涯学習センター

研修室を使用したさっぽろ市民カレッジの開催や、ホール・講堂等の貸室事業を通して、市民の「学び」を支援。

コロナ禍で来館形式の主催事業が中止となり、貸室利用定員の制限を行うなど、利用者数の減少傾向が続いている。一方で、講座をYouTubeで配信するなど、新しいかたちで学びの支援を行っており、今後リモートの学習環境を充実させるべく、映像配信機器の整備を進めている。



令和元年度開催の講座の様子（コロナ以前）